

---

# 幹也君の日常

すずらん

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

幹也君の日常

### 【Nコード】

N4663T

### 【作者名】

すずらん

### 【あらすじ】

家庭の事情で編入してきた如月学園。  
無自覚美形が繰り広げる  
王道な学園ラブコメディー

## 読む前に

初めまして、本作品「幹也君の日常」を投稿させて頂いています”  
すずらん”と申します。

この作品は18禁・BL（ボーイズラブ）作品となっております。

♡ボーイズラブに嫌悪感のある方・すずらんの作品がお嫌いな方・  
王道が嫌いな方♡

上記のうち1つでも当て嵌まる物がありましたら、ご観覧をお勧め  
しません。

18禁場面がありましたら題名に【 】を付けさせていただきます  
ので、

18歳未満の方、またはそういう場面が苦手な方は飛ばして御読み  
下さい。

出来るだけ読まなくても大丈夫なようにします。……がんばります。

それでは、以上の事を注意してご観覧下さい。

すずらん

## 主人公と友人達

### 登場人物

工藤 幹也 くどう みぎや 山本 幹也 やまもと みぎや

・家庭の事情で如月学園に編入した。

・172cm / 54kg / B型

・綺麗な物が大好き

・運動神経は抜群。編入してくる前、1人で街で族つぶしをしていてた為、喧嘩はものすごい強い。

・学校では、色々と面倒なのでちょっとした変装している。

・口調は間延びしていて、ヘラヘラした感じ

・街では、全身黒い服に赤黒な髪で、ひらひらと綺麗に動き回る姿から「黒蝶」と呼ばれている。

・素顔は、赤黒い髪の毛に右目赤と左目灰色のオッドアイ。

・左目の下の方にある泣きぼくろがセクシーな雰囲気を出している。

神崎 圭斗 かんざき けいと

・幹也の同室者

・178cm / 58kg / A型

・幹也とは違うタイプの美形

・学力、性格、運動神経ともに良い。

・幹也に甘い。

二乃宮 燐 にのみや りん

・幹也達と同じクラス

- ・ 182cm / 62kg / O型
- ・ 幹也に甘い。
- ・ 赤い髪（人工的）とりんと言う名前から、幹也に「りんごちゃん」と呼ばれている

きのした  
木下 紫季

- ・ 幹也たちと同じクラス
- ・ 163cm / 43kg / AB型
- ・ 女の子のような顔と性格。可愛いものが大好き、幹也も大好き。
- ・ 幹也には「しーちゃん」と呼ばれている

かみじょう  
上条 幸介

- ・ 幹也たちと同じクラス
- ・ 186cm / 65kg / B型
- ・ 関西弁の金髪黒目のチャライ奴
- ・ 幹也が編入してくる前から知り合い。
- ・ 寮長をしている
- ・ 金猫きんねことして有名

さおとめ  
五月女 凧

- ・ 4組寮の副寮長。3年生
- ・ 優しくてにこやかな雰囲気の人
- ・ 純和風の人で、部屋着は着物。

## 生徒会役員

山岸 堆靖 やまぎし たいせい

- ・如月学園 俺様、生徒会長
- ・187cm / 64kg / A型
- ・オレンジに近い茶髪に焦げ茶の瞳
- ・俺様な最強イケメン
- ・mild(ミルド)の総長

吉野 麻雄 よしの まお

- ・如月学園 苦勞人、生徒会副会長
- ・176cm / 56kg / O型
- ・金髪青目の外人顔。母がフランスの人
- ・美形。腹黒。怒ると怖い
- ・mildの副総長兼、参謀

田丸 雨彌 たまる うみ

- ・如月学園 我侂双子、生徒会書記
- ・175cm / 55kg / B型
- ・虹爾の双子の兄。
- ・薄い茶髪の美形。 虹爾といつも行動してる
- ・mildの幹部

田丸 虹爾 たまる にじ

- ・如月学園 我侂双子、生徒会書記
- ・175cm / 55kg / B型
- ・雨彌の双子の弟。

- ・兄と同じ容姿。 雨彌といつも行動してる
- ・ mildの幹部

おおもり  
大森 頼十

- ・如月学園 無口、生徒会会計
- ・ 179cm , 59kg , O型
- ・ 黒髪茶目のイケメン。 肌の色は黒い。
- ・ 無口だけど優しい人
- ・ mildの幹部

やの  
矢野 気宇

- ・如月学園 遊び人、生徒会補佐
- ・ 176cm , 58kg , A型
- ・ 青髪のウルフカット。
- ・ チャラくてイケメン
- ・ 情報屋

## 教師達

工藤 白くどう はく

- ・如月学園総理事
- ・年齢不詳の幹也の叔父。
- ・工藤財閥の現党首
- ・クールなイケメン

工藤 黒くどう 黒

- ・如月学園 1 - B 担当教師
- ・白の弟。26歳、英語担当
- ・工藤家の次男
- ・幹也溺愛中

村田 幸慈むらた ゆきじ

- ・如月学園 保健教諭
- ・眼鏡を掛けた優しいそうな奴
- ・実は只の変態教師

金城 虎きんじょう とら

- ・生徒会担当教諭
- ・金髪オールバックのヤクザみたいな外見だけど、良く見ればイケメン。



・口調も悪いが、実は優しい人

## 始まり

「へー、結構でかいんだ。」

どうも初めまして、俺は工藤幹也です  
俺は今日から如月学園ってゆー、  
叔父さんがやってる学園に通う事になったんだ。  
今は、その学園の門の前。

「てかー、これどうやって入ればいいの。」

呼び鈴とか無いんですけど！  
扉も無いし。うーん、どうしようか。

「この門、飛び越える？」

高さは4m強って所かな？  
まあ、飛べない高さでは無いよねー。

「うっしや、いっくぜー」  
「見てくれよ、俺のかっこいい姿！」

少し後ろに下がって助走をつけて、いっせーのーっで！

「うりゃっ」

ダンッ

「ふう、さすが俺」

なんて自分の勇姿にうっとりしてたら、なんか行き成りな警報みたいな音が…。

ウーウーウーウーウーって鳴ってるんだけど

「え、え、なに?!飛び越えたからー?!うわー!どうしょ!!  
…まあ、扉も何もつけてない方が悪いよね。うん。逃げよう」

てことで、俺は警報無視して走った。とにかく走った。あてもないけど走った。

10分ぐらい全力疾走した頃かな?

まあ、全力疾走って言うても、7分ぐらいからもうヨタヨタだけだね。



うーん、と頭を回していると、かすかに人の声が聞こえた。

「あつ、いや…」

人が居るなら道を聞こうと思って、声のするほうへ近づく。近づけば近づくほど、なんか脂汗が出てくるんだけど。なんでって??だって、声がね。

「んむつ、あつ、う、ん…」

いかにもナニの最中ですよって感じなんだよね。それでも、俺は足を止めない。だって、その喘いでる人じゃないほうの奴の言葉が聞き捨てならなかったから。

「うつせーな、ギヤーギヤー言っていないで啜えてればいいんだよ。」

ね、こいついつの聞いたら無視することも出来ないでしょ？明らか襲ってるじゃん。いや、SMプレイかもしれないけどね。その場合は俺も見てもぬふりするけどね。

ああほら、やっぱりね。

ナニの最中の場所へたどり着くと、1人は右頬が赤くなってて、そこを涙が流れてる。

ああ、ほっぺ、殴られちゃったのかな？

もう1人は、その子の口に自分のものを押し込んでるんだ。

んー、でも、コレもSMに入るのかなー？もし同意の上だったらどうしよう。

むーっと唸りながら首をかしげていると、一見犯されてると見える男の子が、俺に気づいた。

目が合って、どう？というふうな目で見つめると、その瞳から涙をポロポロと流した。

コレは暗に助けてと訴えてるのだろう。助けを求められたからには、助けないわけには行かない。

「ねーね、そこの君？なーにしてんのっ」

俺の存在に未だ気づいていない『ハツハツ』といいながら、男の子の口にイチブツを突っ込みながら

腰を振り続ける男の方をチヨチヨンと突付いてそう言った。

「あ？」

そういつて、男が振り返った瞬間、そいつの顔面に右ストレートっ！

「…っ」

ソイツは吹き飛ばされた。

意識はあるみたいだね。まあ、手加減したから当たり前だけだね。

「ねー、何してんのって聞いてんだけどー？」

犯されてた男の子の服がビリビリになっていたので、上から俺が羽織ってた

カーデイガンをかぶせてあげて、一度背中をさすってから、

吹き飛ばされた男の元に行ってそいつの腹に足を置いてグリグリとすこし力をいれながらそう問う。

「うぐっ」

そいつは苦しそうに顔をゆがめた

「ねー、何回聞けばいいの？早く答えないと、もっと強くしちゃうよ？」

そっういいながら、また少し力を強めた。

それでも答えないコイツ。

「はあ、俺には襲ってるよーに見えたんだけど？  
まあ、今更違うつって言っても信じないけどー？  
悪い子にはお仕置きしなきゃ。ね？」

俺はにやりと口端を吊り上げた。  
男はそれを見て、一気に青ざめ

「ごめんなさつ」  
謝ってきた。

「ね、コイツ謝ってるけど、どーする？許す？やっっちゃっつ」  
俺は襲われた子にそう聞いた。  
だって、俺はコイツがどうなるうとどーでもいいしね。  
許せるか許せないかはそのこしだいだし。  
そう思っつてその子を見つめると、

「も、いい…です。助けてくれてあり、がと…」

と、涙を流しながらそうつぶやいた。

「ん、分かったー」

「…でも、少し。」



そういつて、ソイツの鳩尾みぞおちに蹴りを一発入れてやった。

「ぐえっ」

すると、ソイツは蛙が潰れたような声を出して、気を失った。

最初はそのこが許すならいいやと思ったけど、

なんか、綺麗な涙を流すもんだから、そのこを汚した奴がなんとなく許せなくて…ね。

ついヤツチャツタ

「ね、君、大丈夫？立てる？」

「あ、はい…。本当、有難う御座いました…。」

「ん、いいんだよ！。それより、一人で帰れる？」

「だいじよぶ、です…。」

「そ、良かった。気をつけてね。あ、そういえば、俺理事長室に行きたいんだけど、

良ければ案内してくれない、かな？」

「ん、いいですよ」  
「そう、ありがとね。」  
「いえ、こつちこそ、本当にありがとう」  
「いいんだよー、好きでやったことだしねー」  
「でも、」  
「その変わり案内してもらおうからー」  
「あ、うんっ！まかせて」  
「うん、よろしくね」

「あ、そういえば、なんていう名前なんですか？」  
「んー、俺ねー、くどーみきやってーの。」  
「くどー？」  
「うん。工藤幹也」  
「え、工藤って…？」

「あー、なんかね、叔父さんが総理事さんなんだってー」  
「そ、りじっ?!」  
「そぞ。よくわかんないんだけど、偉い人？らしーよ」  
「え、工藤白?!」  
「あー、そうそう。よく知ってるね？有名なのー？」  
「有名もなにもっ、」

「それよりさー、君こそなんて名前なの？」  
「あ、俺は木下 紫季ー!!」  
「ふーん、じゃあ、しーちゃんだね。」  
「しーちゃん？」

「うん、可愛いでしょ。」

「ふふっ、それじゃあ、幹也君はみーちゃんだねっ」

「そーだねー、」

「あ、ここだよっ」

「おー、大きいね。ありがとしーちゃん。本当に、気をつけてね。」

「どういたしまして。うん、ありがと。」

「うん。じゃあ、ばいばいー」

しーちゃんと別れて、目の前の赤レンガの道の先には大きなビルのようなマンションのような建物があった。

おー、やっぱり大きい。

名づけて、理事長ビルだな。

ブルルルル」

そう思っていると、携帯電話が鳴った。

「はいもしもし?」

『あ、幹也? どうした? 迷った?』

「あ、白さん? あのね、門に扉もなにも無かったから、門飛び越えたら警報が鳴ってさー!」

びっくりして走って逃げたら森にまよいこんで…」

『あの警報は幹也だったのか…』

.

「ん、そーだよ。でもね？扉とか用意して無いほうが悪いんだよー？」

『扉ならあるぞ』

「え？無いってー。俺見たもん」

『警報が鳴った方角の反対にあるんだよ。』

「……。そもそも1つしか用意して無いほうがおかしいー」

『扉が何個もあったら侵入者や無断外出者が増えるからな。』

「……」

『……はあ、まあいいよ。それより、今何処に居る？』

「あー。今ね、森抜けて理事長室があるところの目の前」

『分かった。それじゃあ、中はいつてフロントに言つて13階まで来い。』

「ん、りょーかい。それじゃね」

『ああ』

電話を切つて、ビルのような建物に入った。んー、やっぱり中も高級ビルって感じたな。なんか絨毯敷いててフカフカだし。フカフカ絨毯を歩いてフロントへ向かった。

「すみませーん、」

「はい、なんででしょうか？」

声を掛けると、フロント係のお姉さんが出てきて、ニコッと笑った。美人だなあ。俺、綺麗なモノって大好き。

「理事長室に用があるんですけど」

「お名前をお聞きしても宜しいでしょうか？」

「工藤幹也つていいます」

「工藤様…ですね。少々お待ち下さい。はい、承ってます。

それでは、ご案内させていただきますね。此方です」

そう言つて、その女の人が出てきた。

ああ、スタイルもいいな。すっごい綺麗。

「どうかしましたか？」

「あ、いいえ」

「そうですか、それでは、どうぞ」

そうしてエレベーターに促された。

チンッ

「此方で御座います」

エレベーターを降りて、1つのドアの前まで歩いた。

それにしても、廊下が凄く長い。

そのくせドアはこれひとつしかないんだけど。

てことは、あれか？このドアの中がすげー広いってことか。  
金持ちめ。

「あ、はい。有難う御座いました。」  
「いいえ、それでは、失礼致します。」

とって、女の人は帰っていった。  
さて、とりあえず、とても広いと思われる部屋の中身を拝んでみよ  
うじゃないか。

コンコン

「白さーん、幹也だけどー」  
「入れ」

「おじゃましまーす」

んー、中身を一言で表現するなら、「広い」だね。  
だって、ねえ？これを広い以外でどう一言で表現しろというんだ。  
や、誰も一言でなんて言っただけだね。

「んー、ひろいね」

「ん、ああ。そうか？まあ、特に狭いと思ったことは無いが、それ  
ほど広くも無いだろう。」

「へー、」

金持ちめ。

「それより幹也、座ったらどうだ？」

「あ、うん。」

「何か飲むか？」

「えっとね、コーヒー。ブラックでねー」

「分かった。」

白さんが、椅子から立ち上がった。

あれだ、理事長専用の椅子。白い革張りで、背もたれがあって、  
なんかやわらかそう。

よし、今度座らせてもらおう。座ってぐるぐるしよう。



んで、椅子の前にある、焦げちやの机。  
いかにもって感じな机だ。

テカテカしてて、上には整頓された書類が積み重なってる。

さっき言ったとおり、床は赤い絨毯で敷き詰められてて、

壁はクリーム色の綺麗なバラの模様が入った壁紙が張られてる。

天井には、シャンデリアがぶら下がってる。

今俺が座ってるソファも、きつと相当高いよ。

だって、もう、メチャクチャフカフカだもん！

雲に乗ってるようにね！

なんか、フカフカすぎて埋もれちゃう。

「んー!!」  
「…なにしてるんだ」

なんかもう、埋もれちゃって身動き取れないからジタバタしてたら  
白さんがコーヒー持って帰ってきた。  
ついでに、可哀相なものを見るような目で俺を見てきた。

「ちよ、白さん、そんな目で俺を見ないで!! てか、動けないー」  
「はぁ、掴まれ」  
「ぶはぁー、ありがとう」  
「ほら飲め」  
「ん、おいしっ」  
「俺が淹れたコーヒーだからな」

白さんがニヤけながらそういった。  
なんか、イケメンはニヤけてる顔もイケメンだ。くやしい。

「それより、幹也。なんでお前そんな、」  
「んー、ああ、コレね。」

そんなって言うのは、多分俺の外見のこと。  
今の格好は、茶髪で、黒いカラコンとグレーの粹なしめがね。  
いつもは、赤黒い髪に赤と灰色のオッドアイなんだよねー。

「此処って、m i i d (ミルド) 居るじゃん？アイツら、俺にやられたからかしんないけど、

黒蝶クワダクのこと探し回ってんだよねー。

ばれると色々うざいから、髪スプレーで茶色くして、カラコンいれて、めがね掛けて

ちよつとした変装してみた。

本当はオタクルックにしようかと思ったんだけど、さすがにモサモサすぎて止めといたー。」

クスクスと笑いながら俺が言うと、白さんは納得したようにうなずいた。

「成る程。まあ、その変装もこの学園では色々意味無いだろつな。」

「え？」

「ああ、言ってなかったか？この学園の生徒は、同性愛者が過半数を占めてるんだ。」

「…は？」

いやいや、ちよつとまで。これは流石に驚く。

別に偏見は無い。偏見は無いが、同性愛者が過半数ってどうなんだろう…。

「ノーマルは5%ってところか。」

「え、馬路で？」

「ああ。だから、お前の格好は危なすぎる」

「何が？」

「だから、この学園は同性愛者が多いんだ、」

「うん、そこは分かった。」

「その中で、綺麗な奴や可愛い奴は狙われるって言っているんだ。」

あ、そういえばさっきの森で襲われてた子も可愛かったもんな。  
まあ、それは分かったとして…

「なんで俺の格好が危ないの？」

「…はあ。お前はもう少し自分の容姿に自覚を持ったほうがいい。  
」  
「自覚？」

「、まあいい。襲われない様につける。」  
「やだなー、白さん。俺が襲われるわけないでしょー？俺を誰だと思ってるのー！」  
襲ってこようとした奴なんてやっつけちゃうよ  
俺は笑って受け流した。

「ああ、そうだな。学園の説明するか？」  
「んーん、大丈夫。自分で発見していくからー」  
「そうか。それじゃあ、これを渡しておく。」  
「なにこれ？」

渡されたのは、金色のゴールドカード。て、あれ？金色のゴールドカードってなんか変。  
まあ、とりあえず金ぴかのカードを渡されたわけで。

「それは、理事長専用のカードキーだ。」  
「えー、俺理事長じゃないー」  
「それくらい分かってる。そのカードは、どこの鍵でも開けられるんだ。」  
「へー？」  
「此処の部屋はそのカードが無いと開かない。いつでも会いに来い、幹也。」  
「ん、分かった。ありがとね、白さん」

「ああ。 ついでに、それはこの学園の財布にもなるからな。 なくすなよ」

「え、俺振込みとかやってないけど？」

「それは俺がやった。 適当に、1000万ぐらい振り込んだ。 まあ、無くなったら言え。」

「はい。 って、1000万?!」

「ああ。 それじゃあ、何かあったら連絡しろ。」

金持ちめ。

もう、こうなったら使いまくるしかないと思う。  
…。まあ、そんな大金使う勇氣無いけどね。

「んじゃあ、コーヒーご馳走様でしたー！」

「ああ。じゃあな」

「はい、ばいばい」

大きな黒に近い茶色のドアを開けた。

んで、理事長ビルを出て赤レンガの道を進んだ。

白さんが、レンガの道を進めばすぐに寮につくって行ってたから。

「にしても、遠いー」

理事長ビルを出て、かれこれ30分ほど。まだまだ寮は見えない。

白さん！！何処がすぐにつくんですか！！

てか、今まで歩いてきて、誰ともすれ違わなかったんだけど。俺、  
道あつてるよな？

俺は来た道を振り返った。

戻って、白さんに案内してもらおうか？

いやいや、でも白さん忙しいし。

それより、此処まで来て戻るのちょっと俺のプライドが…。

「ああもー、動けないー」  
ていってしゃがみ込んだ。誰か助けてくれまいか。  
まあ、そんな タイミングよく誰かが通りかかることなんて無いだ  
ろうけどね。  
て思ってたなら、遠くから人の気配がした。しばらくしたら気配が近  
づいてきて、

「どうかした？気分でも悪い？」

て声掛けられた。これは、幸運の女神様が俺に手を貸してくれたと  
受取っていいのだろうか。  
そんなことを思いながら、頭上を見上げる。

頭上の人物を見て、俺の顔は一瞬固まった。まあ、すぐに戻したけ  
ど。

なんで固まったかって？ だって、目の前に、m i l dの副総長 -  
- 麻雄が居るのだ。

「大丈夫？」

「はい、大丈夫ですー。」

そういって笑顔を貼り付ける。

すると、麻雄が手を差し出してきた。俺は大人しくその手につかま  
った。

「有難う御座います。」

「どういたしまして。それより、見たこと無い顔だね？」



「ああー、今日編入してきたんですよ。」

「へえ、時期はずれだね。」

「家庭の事情ってことで。」

俺がそういつてははつと笑うと、そつかあと言って麻雄も笑った。

それより、あまりコイツと一緒に居るのは宜しくない。

なんてつたつて、コイツはm i i dの副総長で参謀だ。頭が回る。

m i i dの前で顔を晒した事はないけど、あんまりじっくり見られ  
てもしもバレたら色々めんどい。

でも、折角道行く人に出会えたんだ。

この機会をみすみす逃すのは勿体無い。

「あの、初対面で申し訳ないんですけど…」

「うん、どうしたの？」

「俺、道に迷っちゃつて…。ちよつと寮までの道を教えてほしいん  
です。」

「ああ、いいよ。なんなら、案内しようか？」

「あ、教えてくれるだけでいいんですけど…」

「遠慮しなくてもいいよ。もうすぐだしね、案内するよ。」

「あ、えつと…」

面倒くさい。良いつて言つてんだから良いじゃん。

でも、此処で変に断るのも逆に不自然か？

ま、顔見られてバレるなんてこと無いよな。もういいや。

「すみません、じゃあ、お言葉に甘えて。」

.

・(前書き)

遅れましたー、最新です(、?、?)

「ふふ、任せて？」

麻雄はそう笑った。

んー、何か…。

麻雄は色で例えると灰色って感じた。

黒くも無ければ白くも無い。

微妙ってところか。今の笑顔も黒よりの灰色って感じた。

「それじゃあ、行こうか？」

麻雄が歩きだす。俺も、迷って堪るかと思いを追う。

さつき、「もうすぐだしね、」と麻雄が言っていたが、本当に俺がしゃがんでいたところから

すぐ近くに寮があった。あの時もうちょっと頑張ってたなら麻雄に会わなかったのになー。

「ここだよ？」

麻雄が立ち止まったのは、中世ヨーロッパ風の長家が7列並んだ場所だった。

「え、ここですか？」

「うん。寮長はあそこの家ね。」

そういつて麻雄が1つの家を指差す。

「それじゃあ、僕はそろそろ行くね？」

「あ、はい、ありがとーございませした」

「ふふ、どう致しまして。あ、そういえば君の名前を聞いてなかつ

たね。」

「ああ、俺は…山本幹也つています。」

俺は咄嗟に偽名を使った。工藤幹也で情報を探られたらめんどうだし。

ああ、でもしーちゃんに本名乗っちゃったなー。

ま、口止めしとけばいいかあ。

「…ふーん、山本幹也君、か。」

「はい、山本幹也です。」

「…へえ」

麻雄の顔が何かを探るような表情に変わったのを俺は見逃さなかった。

「どうかしましたかー？」

「ん、ううん。なんでもないよ。僕は吉野よしの 麻雄まお。よろしくね、幹也君」

そういつて右手を前に出す。

あー、これは、握手つてことかな？ ま、別にいいけど、ね。

「宜しくお願いしまーす、吉野先輩」

俺は軽く微笑みながらその手を握る。

「…っ」

麻雄、いや吉野先輩は顔を赤らめて目をそらした。

あ、俺の笑顔にやられた…とかあ？ そんなことあるわけないけど

さあ。

そんなこと考えてると、俺は無意識にクスクスと笑っていたようだった。

「どうかした？」

吉野先輩が不思議そうに俺の顔を覗き込む。

「ふふ、吉野先輩握手で赤くなって、なんか可愛いなーと思っただけです」

あんまり顔を見られたくないから俺はさりげなく顔を逸らして答えた。

赤くなって可愛いと思ったのは嘘じゃない。

これがm i i dのメンバーじゃなかったら、本当に可愛いと思えるのにな。

「そ、そうっ」

吉野先輩は余計に赤くなって、俺は堪らずにまた、クスクスと笑う。

「も、笑わないですよ…」

「…っ、ごめ、なさっ」

笑が止まらなくて少し言葉に詰まりながら謝る

「全然悪いって思ってない！」

「ぶっ、すいませ」

そうは言っても、そういいながらまた顔を赤くするから、俺は面白いことこの上ない。

ついに吹き出す

「ぶっ！ あはははははっ、吉野せんば、おもしろっ」

「いいかげんに、しなさいっ！」

吉野先輩が痺れを切らした見たいで、少々声を荒げながらそういう。

「ごめ、なさ」

それを聞いて俺は少し正気を取り戻す。さすがに笑いすぎた。目じりにたまる涙を指先で拭って吉野先輩に向き直る。

「すみません、あんまり吉野先輩が可愛かったからー。だから、怒らないで下さい、ね？」  
怒ってプルプルと震えてる吉野先輩の頭をぽんぽんと撫でる。

「…だめー、ですか？」

反応が無いから許して貰えないのかと思って尋ねると、プルプルと頭を横に振る。

「よかったー。吉野先輩、本当に笑ってごめんなさい。」

「もういいよ、」

「ふふっ、それじゃー、俺は寮長に会いに行きますねー」

「うん、気をつけてね。」

「はい、ありがとうございますー」

そついうと吉野先輩は「じゃあね」と言って手を振って違う方向へ歩き出す。

俺はさっき教えてもらった家へ向かう。



寮長さんの家についてインターホンを押す。

・ピンポーン・

あ、家の見た目がこれでもインターホンの音が庶民的だ。ミスマツチって奴か。

まあ、なんか落ち着くけどさ

…ん、出ないぞ。留守???

・ピンポーン・

・ピンポーン・

・ピンポーン・

・ピンポーンピンポーン・

・ピンピンピンピンポピンポーン・

「! ピンピンピンピンピンポピンポ」あああああ、うっさい!

「うわっ」

全然出てこないからちよつとイライラしてインターホンを連打してたら

中から凄い剣幕した人が出てきた。

「なんじゃぼけえ!!」

「……」

え、なんかコノ人知ってるんだけど。あれ、見間違い? 幻?

「誰やお前。」

んー、やっぱり現実みたい。でもコイツ俺に気づいて無い。

「なんや、黙ってへんでなんか喋れや」

「…あー」

「お前、用無いくせに人の睡眠邪魔したんか?」

「や、用はありまーす」

「なんやねん、はよ言え」

「俺、今日から転校してきた者でーす」

「ああ、お前がか。中入れ。」

「はーい」

そいつがそういつて部屋に入って行ったから俺も着いてく。

「すー」

「なんで棒読みやねん」

いやいや、棒読みじゃないけどね。本心なんだけどね。まあ別にいいけどさ。

「おじやましまーす」

「今更やな。」



「ぷっ、すっごい驚いてるねー?」

「な、なっ、なんで幹也が此処に?!?!」

「家庭の事情ってやつでさー。ところで、こっけ幸介、

何時の間に俺に対してさっきみたいな口利けるようになったの?」

「や、あれは!! 違うねん!! 幹也って気づかんくて!! 堪忍してや!」

「へえ? 幸介はちょっと会ってなくて、その人の見た目が少し変わってるだけで

相棒のこと忘れちゃうんだ? へー、そっか。見損なつたなあ。」

「ちょー! 幹也! ごめん! てか、ちょっと変わった所じゃないやろ! 見た目めちゃくちゃ変わってるやん!」

「てゆーかあ、俺って気づかなくても、初対面の人にあーゆー態度はどうかと俺、思う。」

「そ、それは、… すみません……」

「俺いつも言ってるよねー? 無駄に敵作るなよって。」

「うん…」

「初対面での言い方、不良だったら完全に敵だよ? 分かってる?」

「うん…」

「幸介の敵は相棒の俺の敵にもなるんだから、幸介があの態度でどんだん敵作っちゃったら

自然と俺の敵も増えちゃうんだよね。面倒なことはさせないでね?」

「うん」

「さっきから同じことしか言ってるよ、幸介」

「ごめん」

「ふう、もういいや。許してあげるから、泣くなよ」

「誰も泣いてへんわっ！」

「へえ？じゃあ、その目の縁に溜まった水は何なのかな？」

「これは、あれやっ！あくび！」

「そっか、ならいーや」

幸介がおかしくて俺はクスクスと笑う。

それにつられて幸介も笑い出す。

終いには2人で転げまわりながらの大笑い。

2人で居るといつもこんな感じ。

「それより幹也、何で幹也がこの学園に居るんや?」

幸介が笑いも収まったところで聞いてきた。

「だから、家庭の事情だつて。」

「あ、そっか。そついや、なんでそんな格好してるんや?」

あー、これさつき白さんに話したからまた説明するのめんどくさい。どうしよ、無視して良いかな、良いよね別に。めんどくさいし。

「それよりさー、幸介が寮長なんてびっくりー」

「幹也、人の話聞きや」

「てゆうか、幸介に寮長つて似合わないー」

「幹也」

「柄じゃないよね、ふふ、笑えるかも…」

「みーきーやー」

あーもー、しつこいな。まあ俺が悪いんだけどね

「なに、幸介」

「だから、何でそんな格好してるん?」

「あー、これね。これはね、変装。」

「や、それぐらいわかっとなるけど。なんで変装してんのやって事聞

「いてるねん」

「だってさ、この学園m i i dいるじゃん。黒蝶ってばれて絡まれるのめんどいしー」

「なるほど。」

「てか、幸介は顔も晒してるのに、絡まれたりしないの?」

「あー、されるされる。m i i dのあほな下っ端がよう喧嘩売ってくるわ。」

「それでどうしてんの?」

「重傷にならん程度に潰してるわ。」

「そっかー。やっぱり絡まれるんだ。」

「うん。まあ俺もストレス発散の場所が出来て丁度いいけどな。」

「そかそか、ならいい。」

「てか、今更やけど幹也久し振りやな」

「そだねー、2ヶ月ぶりぐらい？」

「そうやな。今まで何で街こやんかったん？ 俺めっちゃ寂しかったわ」

「ごめんごめん。2ヶ月前からこの学園に転校すること決まってるさ。」

俺、幸介が此処の学園に居るって知ってたしさー。どうせなら幸介をビツクリさせたかったわけ。

そんなときに幸介に会ったら、俺絶対喋っちゃうもん。だから会わなかった」

「そんなことかよ！ 俺怪我でもしたんかと思ってちょっと心配しててんで。」

「でも、びつくりしたでしょ？」

「そりゃー……。」

「ドツキり大成功！」

「……」

「……」

「……まあ良いわ、じゃあ本題に入るか。」

「本題？」

「幹也は何のために此処にきたん。」

「えー？……ああ！寮長に寮の説明受けに来たんだった！」

「そう。俺寮長。だから寮の説明しまーす。」



「はい」

「えつとね…」

幸介の説明は時々話から反れたりと色々ゴチャゴチャだったから、俺がまとめると

此処に来る前に見た中世ヨーロッパ風の大きい長屋の建物が寮らしい。

寮は、各学年のクラスで分けられてるらしい。

俺が今居るところが一番左にあつた寮長専用の建物だ。

7個の寮の寮長が集まって、7人で生活しているらしい。

この寮の右横が生徒会専用の寮。

その右横が1・2・3年の1組の生徒が生活する場所。

その右隣が1・2・3年の2組の生徒が生活する場所。

その隣が…という風に5組まで続いている。

どの寮も5階まであるらしくて、

1階がロビー。ちなみに副寮長さんの部屋がある。

2階が娯楽施設がある場所。大浴場、スポーツジム、美容室、コンビニ、色々な店などがある。

3階が1年生の生活スペース

4階が2年生の生活スペース

5階が3年生の生活スペース

っ  
な  
っ  
て  
る  
ら  
し  
い  
。

別のクラスの寮に行く場合は、寮の入り口を出て、庭を歩いて目的の寮の入り口を通るだけ。

ただし、それは一般寮に限り、寮長専用、生徒会専用の寮には入れないらしい。

あ、今日俺が普通に入れたのは、転校生が来るって知ってたからセキュリティを切ってたからなんだった。

ちなみに、街への外出とかは副寮長さんに言えば良いらしい。でも、外に泊まる場合は、少し書類とか書かないといけないらしい。

俺、結構外泊する予定だったんだけど、一々書類書くとかめんどくさー。

ってまあ、私情は置いといて、寮の説明はこれぐらいかな。

「あ、幸介、話戻るんだけどさ、俺さっきmildの麻雄に会った。

「へー、mildの奴やのに幹也から話掛けるとか、なんかあったんか？」

「え？俺から話しかけてないよ？」

「え？麻雄から話しかけてきたんか？」

「うん。俺が話しかけるわけ無いでしょ？」

「それもそーか。てゆか、なんで…？」

「は？」

「……あいつは……」

なんか幸介が一人でブツブツ呟いてる。めんどくさいからスルー。

「それでさ、幸介。俺本名知られて色々探られても困るから、つい偽名使っちゃったんだよねー」

「…ん、なんや、偽名？」

「そ。山本幹也って言った。」

「へえ」

「だから、俺この学園で山本幹也って名乗るね。」

「ふーん。おめでとう？」

「別におめでたくないけどね。」

「いや、なんて言えばいいのかわからんくて。」

「んまあ、いいけどさ。それで。この学園では山本だから、工藤って呼ばないでね？」

「ま、幸介は幹也って呼んでるから工藤なんていわないだろーけど。」

「ああ、うん。分かった。」

「んじゃー、そろそろ部屋に行ってみようかな。」

「おう、じゃあまた話そな。襲われんように気い付けや。」

「もー、白さんもそれ言ってた！俺が襲われるわけないじゃん？  
返り討ちだし」

「それもそーやな。んまあ、気付けどや！いざとなったら俺が助けるけどな。」

「ふふっ、よろしくね。」

「おう、任せときー！」

「それじゃあねー。ばいばい」

「ばいばい」

幸介に手を振ってから外に出た。俺は4組らしいから、左から6個目か。結構遠いなー。

俺はトボトボと歩き出す。

・(後書き)

明日は幹也と幸介の関係を説明しますW

(幸介side) 1(前書き)

幸介と幹也の出会い編です。  
過去の話で、長めです。

(幸介side) 1

幸介side

「はぁ、びっくりした」

幹也が部屋出て行って、俺は息を吐く。

まさか、幹也がこの学園に来るなんか、思いもせえへんかった。

幹也との出会いは3年前、中学三年生のとき。

小学生のときからこの学園で暮らしてて閉鎖的な空間に、色々ストレスとか溜まって

夜に学校を抜け出して街に出た。

俺は学園では不良の部類に入ってた、喧嘩もしてたから、

喧嘩とかに巻き込まれても大丈夫やろって思ってた。

街をふらふら歩いてたら、高校生ぐらいの5人の連中に絡まれた。負けるかと思ってなかったから、そいつらに着いて行って、路地裏に行った。

着いた途端に殴りかかれて、俺は反応できひんくてもろに鳩尾に喰らった。

学園内で喧嘩したっていつてもそんな強い相手とか居らんかったし、そもそも5対1って時点で俺が適う訳も無くて。



案の定俺はボコボコにされて路地裏に倒れた。

意識はあったけど、体が重くて、少しでも動かしたらめっちゃ腹とか痛くて、

何時間か動かれへんくて倒れてるところに、幹也がきた。

『そんなところで寝てたら、風邪ひくよ?』

『バ…カヤロ、誰が、こんな所で寝る、ねんっ』

『じゃあ、何してるの?あ、日向ぼっこ? あ、夜だから日向じゃないよね。月光ぼっこ?』

『…しね』

『ひどー』

『…なんやねん。さっきから、ジロジロ見んなや』

『君、大阪の人?』

『は?』

『いや、関西弁だから。』

『6歳まで大阪に住んでんや。』

『今何歳?』

『15』

『9年も此処に住んでるのに、まだ関西弁抜けないの?』

『俺は、東京弁は好かん』

『ぶっ、東京弁…!! はははっははははは』

『…なんで笑うねん』

『…やつ、関西には標準語のことを東京弁って言う人が結構居るらしいって聞いてたけど、

馬路で東京弁っ…ぶはっ』

『しね』

『ぶはっ、ごめんごめん。…やっぱむりーっはっ』

『…………』

そっからも、幹はずっと笑いながら話しかけ続けてきた。

助けるわけでも心配するわけでも殴りかかってくるわけでもなく、ただ隣に座って

クスクスと笑いながら俺に他愛も無いことを話してきた。

俺は、変な奴やと思った。あ、嫌な奴とも思った。

だって、怪我人の心配もせんと自分だけ笑って、最終的には俺ほったらかして

どっか行きよったから。

幹也が消えてから、時間が経つにつれ痛みもましになって、学園に戻った。

幹也と話してたらイライラも結構収まってたけど、閉鎖空間に戻ったらやっぱりイライラして、次の日また学園を抜け出した。

もしかしたら、幹也に会えるかもって思って。

そのときは、幹也の顔しか知らなかったから、ただ街を歩いて幹也を探すしかなかった。

幹也を探しながら歩いてたら、また何人かの男に絡まれた。

喧嘩売られといて逃げるのも尺やったから、負けるって分かりきってたけど

そいつ等に着いて行った。

前とおんなじような路地裏に連れて行かれて、またボッコボコにされた。

俺がまだ何とか立ててる頃に、1人の男がとどめとばかりに殴りかかってきた。

もうあかんと思って、きつく目を閉じて身構えた

パシッ

ちょっと軽い音が聞こえて、いくら待っても相手の拳がけえへんからきつう閉じてた目を開けたら

1つの手が、俺の目の前まで来た相手の拳を軽々と止めてた。誰の手やと思っただけその手の主を見たら、幹也がニヤニヤと口元だけ笑ってた。

『楽しそうなことしてるね?』

『誰だよおまえ』

『ふふ、内緒。楽しそうだけど、一般人に手を出すのは宜しくないなあ、賽火さいかさん?』

『俺らのこと賽火さいかって分かってて喧嘩うってんのか?あ?』

賽火さいかってゆーのは、学園で過こしてる俺でも知ってるぐらい有名な不良のチームやった。

『当たり前でしょ?えっと、貴方は賽火の副総長の南倉なぐらさんだっけ?』

『ああ。お前は誰だ?』

『だから、内緒うちそって言ったでしょ? それより、悪い子にはお仕置きしきしないと、ね?』

幹也はそうゆったら南倉なぐらって人の拳振り払って、鳩尾たむらに膝を打ち込んで、南倉が体勢を崩した所で、顔面2発殴って足を払って倒れこませた。賽火の副総長を10秒で倒した。南倉は俺の足元で地面と友達になつてる。

『賽火も大したことないね? ほら、その人達もかかっておいで?』

幹也は挑発的な笑みを浮かべて周りの奴らを招く。

俺には顔は見えへんし、口調だけやったらただ楽しんでるようじしか見えへんけど、  
なんとなく分かる。こいつなんか知らんけどめっちゃ怒ってる、って。

そいつ等もそれに気づいてるのか、後ずさりする。

『根性無しだなあ。素直にかかってきたら手加減してあげようかとおもったのに…』

暇つぶしにもなんない、ねっ』

そいつって幹也は一気に間合いを詰める。

反応できなかった奴があっという間に倒されてく。  
反応できた奴も、後ろから首に手刀を入られたり、背中をおもいつきり蹴られたりして倒されてく。

コイツ、めっちゃ強いやん。

今まで俺をボコボコにしてた奴が、一瞬で全滅した。

幹也は全員倒し終わってこっちに歩いてきた。あんだけの人数相手にしといて  
かすり傷1つないってどうなんや。さっきと違うところってゆうたら、返り血を浴びてるどころだけ。

『君もバカだねえ。昨日の経験で負けるって分からなかったの？  
怪我大丈夫？』

幹也はクスクスと笑いながら俺に尋ねてくる。  
その態度も雰囲気も、さつきすごい怒ってた奴とは違う人物みたい  
に柔らかかった。

『大丈夫や。分かってたけど、喧嘩売られて逃げるとか俺のプライ  
ドが許さんかった。』

『やっぱりバカだね。それより君、街に何しに来たの？  
変にフラフラしてたらまたボコボコにされるよ』

『…お前のこと探してた。』

『俺のこと？』

『うん』

『何のため？』

『…ただ、なんとなく』

『そっか、まあ良いや。そういえば、君なんていう名前？』

『人に名前聞くときは自分から名乗るのがマナーや。』

『ふふつ、そうだね、ごめん。俺は、工藤幹也。よろしくね？』

『俺は上条幸介。宜しくしたくないけど、しゃーないな。』

『なんで上から目線なの。』

そういいながら握手した。幹也と目が合ったらなんか可笑しくて2  
人して爆笑した。

そっから、俺が街に出るたびに幹也とよう会った。

俺も何回も喧嘩してたら段々強くなってるって、街でも結構有名になつた。

ある日、また憂さ晴らしに街に出かけた。

そしたら、黒蝶の姿した幹也に会った。

俺も、黒蝶ってゆうめっちゃ喧嘩強い奴が居るってのは

噂で聞いてたけど、まさか幹也が黒蝶なんか思わなくて、めっちゃビックリした。

『幸介、間抜け顔…』

そついいながら幹也はクスクスと笑う。

『そつゆうたかって、まさか幹也が黒蝶なんか考えもせえへんかつたわ…』

『ふふっ、ビックリした？』

『当たり前や。幹也があ有名な黒蝶やとはな。』

『そついう幸介だって、金猫きんねこて有名じゃない。』

『まあな。』

幹也が黒蝶って呼ばれとつて、俺は金猫きんねこって呼ばれてた。金髪で猫みたいやから、らしい。

よう分からんけど、結構気に入ってる。

それよりも、なんか…。

『なんか、運命みたいだね（やな）』

『真似しないでよ（すんなや）』

『……』

『…ぷっ！！ ははははっ』

そんな会話をしていたら、なんとなく2人で喧嘩しに行こうって流れになって、

一緒に適当なチームを潰した。

その日から、何回か一緒に喧嘩していくうちに、街では、黒猫と金猫ペアの族つぶしってのが有名になって、流れ的に俺と幹也は相棒になった。

その日から、殆んど一緒にすごしてて、最初は形だけの相棒やったけど、だんだんと本物の相棒に近づいていった。

それで、この2ヶ月間顔ださへんと思ったら、まさか転校してくるとはな。

ほんま、どんだけ一緒に居ても全然掴まれへん奴やわ。

幹也がこの学園に来たからには、この学園も平和じゃなくなるやろうけど、

なんせ相棒が傍に居るってのは、すっごいわくわくするわ。

まあ、相棒って言っても俺と幹也やったら幹也のほうか断然強いから



俺は幹也に逆らわれへんねんけどな。特に逆らう気も無いけど。

・(幸介 side) 終

・(後書き)

とりあえず、幹也と幸介はすげー仲良しです

## 色々な出会い

しばらく歩いてたら、4組の寮が見えてきた。

4組寮のドアを開けて、中に入る。

入り口に近いところにある受付に向かう。

受付台の上には、金色の卓上ベルがあった。

此処はホテルかよと思いつながら、チリリンと卓上ベルを鳴らす。

2、3回押してみても反応が無いから、またちよつとイライラしてきて、

幸介のときと同じように卓上ベルを連打する。

それでも今回は誰も出てこない。俺は少し考えてから、受付の中に入り、

奥にある、多分開ければ副寮長さんの生活スペースがあるはずのごつい扉に手を掛ける。

さあ、あけよう。

と思ったときに、今まで誰も居なかったロビーに人の気配がした。

今この瞬間、何も知らない人が見たら、

俺は副寮長の部屋に忍び込もうとしてる変質者って事になるのだからか。

転校早々そんな肩書きを付けられては困ると、俺は急いで受付台の下に身を潜める。

現れた気配を意識しながら、これからどうしようか。

とりあえず、この気配が消えたらここから出て、ロビーのまたまたフカフカそうなソファーに座りながらのんびりと副寮長を待つかな。うん、そうしよう。

なんて考えてたら、だんだん人の気配がこっちに近づいてくる。その気配は、受付の中に入ってきて、副寮長さんの部屋の扉をカードキーであける。

そっか、俺どうせカードキー無いから扉開けられないじゃん。あ、理事長キーあるからいけるのか。

「…ねむ……。寝る、僕は寝る…。6時間ぐらい寝る…」

そう小声で宣言しながら部屋の中に入っていく。

ちよつとまで、この人って副寮長さんだよな。今から寝たらあれか、6時間後に目を覚ますのか。それまで俺は待っておかなきゃいけないのか。それは絶対嫌だ！

「ちよーつと！ー！」

副寮長さんが扉を閉める前に俺は大声を出す。受付台の下で。

「え？」

副寮長さんは目を丸くして振り向く。

俺には気づいてないみたいで、「空耳か？」と呟きながらまた部屋

に足を踏み込む。

「だからー、ちょっとまってー!!!」  
俺はもう一度大声を出す。

「...?」

副寮長さんは顔をキョロキョロと回す。

それでも人の姿は無く、少し首をかしげた。

とりあえず、誰かに呼ばれたという事で、受付台の横にある椅子を取り出して、

受付台の前に座る。

副寮長さんの足が、俺の体に当たる。

「え……」

副寮長さんは不思議に思ったのか、受付台の中を覗く。

それで、俺とがちりと目が合う。

副寮長さんは「え……」と言ってから、固まってる。瞬きすらしない。

息は辛うじてしているようだけど。

「……あー、どもー？ 転校生の山本幹也です」

副寮長さんの驚きぶりに、笑をこらえながらそう言う。

すると、副寮長さんは意識を取り戻したのか、やっと瞬きをした。

「君が転校生？ 初めまして。僕は副寮長をしています、五月女なごめ 凧たか と言います。

皆には、凧ちゃんとか色々呼ばれてます。僕は、五月女さんって呼ばれたいんだけど……」

副寮長さんは、俺を受付台の下に入れながら自己紹介をしてくる。

凧ちゃんか。副寮長さんには可哀相だけど、俺も凧ちゃんと呼ぼう。

「……えーと、宜しくお願いします？ それより、ここから出てもいいですかー？」

「ああ、そうだね。どうぞ」

凧ちゃんは椅子を引いて俺が出るスペースを空けてくれる。  
てか、凧ちゃんは何で俺がこんなところに入っていたか聞かないの  
か。もしか、天然なのか。

「山本君が転校生なら、色々説明しなきゃね。こつちにおいで？」  
凧ちゃんは立ち上がって、もう一度扉を開けて俺を部屋の中に促す。  
俺は特に逆らう理由も無いので、凧ちゃんに続いて部屋に入る。

「あ、そこ座ってね、」  
俺は指示された椅子に腰掛ける。

「それじゃあ、早速説明するね？」  
「はい」

「まず、君のルームナンバーは、4409だよ。」  
「はい」  
「えっと、この寮での鍵は、このカードなんだけど……」  
「あ、それは理事長に貰いました」  
「え？」

「えと、カードは貰いました」  
「？、そうなんだ？それじゃあ、説明はしなくてもいいのかな？」  
「はい」

「んー、それじゃあ、特に説明することも無いかな……？」  
「へえ？」

「……ああ！ 1つあった。山本君のルームメイトは神埼圭斗  
君だよ。」

部屋に行けば、きっと居るんじゃないかな。」

「そうなんですカー、有難う御座います」

「色々戸惑うことがあると思うけど、頑張っつてね。困ったことがあつたらいつでも相談してね。」

「はい。失礼しました」

凧ちゃんは俺がエレベーターに乗るまで見送ってくれた。



エレベーターのドアが閉まって、俺は4階のボタンを押す。  
あ、そういえば白さんに山本って名乗るってこと伝えとかなきゃ。

ブルルルル

『もしもし』

「あ、白さん？おれおれー」

『おれなんて奴知らん。』

プー…ツーツー

んもー、意地悪だなあ。

ブルルルル

『もしもし』

「白さん、意地悪しないでよー」

『何のようだ。』

「……ま、いいか。あのね、工藤幹也って名乗ってたら、なんか目立つみたいだし、

もしmildの奴らに調べられたりしたら鬱陶しいからね、山本幹也って名乗ることにした。」

『そうか。』

「うん、だから一応報告。俺のデータは俺が適当に操作するから」  
『ああ、分かった。』

「ん、それだけ。じゃねー」

『じゃあな』

「あ、白さん。また今度遊びに行ってい？」

『遊びってな。どうせ泊まるんだろ。』

「まあねー」

『いいよ。いつでも来い。殆んど理事長室にいると思っから。』

「はいはい。じゃあねー」

『じゃあな』

プー…ツーツー

よし、白さんにも知らせたし、これでok

お泊りしても良いって言ってもらえたし、うっれしーな。

いつ行こう。いつそのこと今日？いや、今週の土日でもいいか。そう  
しよ。

電話してる間に4階に着いてて、歩きながら電話した。  
道行く扉のナンバープレートを確認する。

「4406…4407…4408…4409みーっけ！」

「そんじゃ、今日から、御世話になります。」

部屋の扉の前に立ってお辞儀する。一応部屋にも挨拶しとかなきゃ、  
ね。

多分こんな格好見たら、また白さんは可哀相なものを見るような目  
で見つめてくるんだろうな。

まあ気を取り直して、ドアノブの横にカード一枚分の空間が開いて  
ある溝に

白さんから貰ったゴールドカードを通す。すると、ガチャと音がし  
て扉が開く

「おおー…」

ちよつと関心。やっぱ金持ちはずごいな。

ドアノブを回して扉を開ける。今は授業中だから同室者も居ない。

そういえば、麻雄は何で庭に居たんだけ？んまあどうでも良いけど。

靴を脱いで部屋に入る。

長い廊下の左右には、3つずつ扉がある。

んー、俺はどつちなんだろう。って思ってたら、右側の一番奥の部  
屋の扉が開いてて

ダンボールが入ってた。

それを見て、右側の扉を全部開けてみる。そしたら、部屋は空っぽ。どうやら俺は右側見たいだ。

とりあえず、ダンボールがつんである部屋に向かう。

今の部屋は寝室。ベッドがあるから。

真ん中は椅子と机以外家具が無いから、俺はパソコンでも置こうかと思う。

一番手前（玄関側）は書斎みたい。本棚がいっぱいある。

部屋を確認した後、荷解きに取り掛かる。

まずはパソコンとかの家電類。

家から、ノートパソコン2台と大型パソコン1台持ってきた。

「んんー!!重っ」  
ノートパソコンは簡単に運べたけど、やっぱり大型パソコンは重い。  
ハアハア言いながら運んだ。

1つの机にノートパソコンを1つ置いて、  
もう1つの大きめの机に大型パソコンをセッティングする。

「んま、こんなもんか。」

とりあえず仕事部屋は終了。

あとは、寝室と書斎か。

次は書斎に向かう。

書斎にある大きな机に、もう1つのノートパソコンを置く。  
後は、家から持ってきた30冊ぐらいの本を本棚に並べて、書斎も  
終了。

残りは、寝室だけ。

まず、クローゼットを確認する。つめれば大人が30人ぐらい入れ  
そうな広さのクローゼット。  
もうクローゼットじゃなくて1つの部屋みたい。  
そんなことを思いながら、『服』と書かれたダンボールをあける。

普段の私服をハンガーに掛けて、黒蝶のときの真っ黒の服も入れる。下着とか靴下はクローゼットの中にあるタンスに詰めた。髪の毛を茶色くするスプレーは、タンスの上に置く。

残りのダンボールは、アクセサリが入ったもの。

俺が好きなブランドのシルバークロムアクセサリが沢山入ってる。

それを、専用のジュエリーボックスに入れる。

なんか、ジュエリーボックスって名前はかわいらしいけど、俺のジュエリーボックスは

真っ黒で蓋の部分に十字架と蝶が彫られてて、その部分だけ白く塗られてる。

すげー俺好み。路地裏の妖しい店で一目ぼれして買った。

指輪、ネックレス、ブレスレット、ピアス、イヤークラスなどを綺麗に並べ入れ、それを机の上に置く。

あとは、適当に鞆とかベルトとか帽子とか靴とかをクローゼットに並べて荷解き完了。

俺は一息ついて備え付けのベッドに倒れこむ。

「…んー、疲れたあ」

荷解きはそこら辺のチンピラ相手するよりもずっと疲れた。

気づけば3時間ほど経っていて、もう3時になる。

あと3時間ぐらいで同室者も帰ってくるかなー。

それまでは寝る。

グー……

俺が眠ろうとして目を閉じると、俺の腹が鳴った。

「そいえば、お腹すいたな……」

寝るのは後で、先にご飯を食べよう。

ベッドから立ち上がって、鞆にいつも入れてるS a Y J O Yを取り出す。

それを食べて、またベッドに乗る。

瞳を閉じれば、すぐに眠気が襲ってきた。

- ガチャ -

眠っていたら、扉が開く音がした。喧嘩してたら嫌でも気配を読む癖がついちちゃって、眠ってても起きちゃう。

多分同室者が帰ってきたんだと思う。腕時計を見たら、5時40分だ。  
時間的にもあってる。

俺はまだ眠い目を擦って、思い体を起す。



ガチャリと目の前の部屋のドアが開く音がする。  
自分の部屋に入ったみたい。俺は部屋を出て、目の前のドアをノックする。

「はい」

返事が返ってきた。

「入ってもいい？」

「ああ」

それを聞いて俺はドアを開けて「おじやましてす」と言い、部屋に入る。

部屋の中は、俺の部屋と同じような造りだった。

その部屋の壁際にある机の前の椅子に座ってこっちに背を向けてる人が居る。

「編入生で、今日からルームメイトになった山本幹也です」

「ああ。神崎圭斗だ。」

そっついながら神崎圭斗が振り向いた。

…え、なんか、かっこいい。

美形だ。かっこいい。馬路で。イケメンだ。

「どうかしたか？」

「…いや、別に」

「そうか？ならいい」

「……」

「なんだ？」

「……かっこいいー」

「……は？」

「かっこいい。」

「ありがとう？」

・(後書き)

やっと圭斗キタ

(。°。)

!!!!!!

うはづはー、これから絡ませるぞええええええええええええ

神崎圭斗と挨拶もして、俺は神崎圭斗の部屋から出て、リビングに向かう。  
そういえば、部屋を片付けてすぐ寝ちゃったから風呂とか見てないや。  
ついでだからみよーっと

「リビングひろー。」

なんだこれ、糞広いぞ。  
全体的にアイボリー調に纏められた部屋はどこかのモデルルームかと思うほど綺麗で広かった。  
てか、これもうモデルルームだろ。俺こんな部屋探したときこんなモデルルーム入ったことあるよ。  
神崎圭斗は今までずっとこんな広い部屋で一人だったのか。贅沢だなー。

てか、神崎圭斗のこと俺はなんて呼べばいいんだ。心の中ではフルネームで呼び捨てだけど  
まさか本人に『神崎圭斗！』なんて直接言うなんて恐ろしくて出来ない。  
いや、別に怖くないけどね。

んー。もういいか、圭斗で良いか。てか、本人に聞けばいいんだよ。  
うん。

とりあえず考えが纏まった。ので、リビングからダイニングに移る。まさかLDKつきとは思ってなかったぜ。

ダイニングとキッチン是对面式になっていて、まあ所謂対面キッチンって奴だ。

てかこの学園でも料理する奴居るのか。

ああでも、あれか、料理人の息子とかありえるよな。

「じゃー、次は風呂ー」

……。

「…うん、何だろう、これ。」

まさかの、どこかで見たことあるようなライオンが口からピンクのお湯を出していた。

浴槽はどっかのホテルにありそうなジャグジー付きの丸型風呂。

ライオンの口から垂れまくるピンクのお湯はにおいつきでほんのりバラの匂いがする。

てか、時々ライオンの口からバラも一緒に出てくるから、湯船の上にはバラが浮いてる。

そんな風呂も広い。

体洗う所てゆーか、シャワーが6つもあるってどうなんだろう。必要なくないか。

んまあ大体風呂全体で十畳ぐらいじゃないかな。

もう広さ半分にして新しい部屋作ったほうが良かったんじゃないか

な。

そんなこんなで部屋探検終了。

.

・(後書き)

久し振りの幹也君。

キャラがちよつと変だったたりしちゃいます(、^ ^、)  
てか、やっぱ金持ち学校って言ったら風呂大事っすよね。  
はい、次回もお楽しみにー

部屋も見終わっただし、特にやることなくった俺は同室者との交流を深めようと思う。

風呂から出てリビングに向かう。神崎圭斗を捜し求めて約6秒。神崎圭斗は普通にリビングのソファアに座ってた。

「けいとくん」

「なに」

「今更だけどー、俺圭斗君のことなんて呼べばいいー？」

「もう圭斗君って呼んでるじゃん」

「これは仮の呼び名ですー」

「それじゃあ圭斗でいい」

「はいはい！んじゃあ圭斗ねー。あ、そだ圭斗！」

「ん、何」

「俺のことは幹也でいいよー」

「分かった」

圭斗はクールみたいだ。別に冷たい訳じゃないけど、特に明るいわけでもない。

大人っぽいというか、なんというか。まさにクールビューティーだ。

「なあ幹也」

「んー、なあに」

「幹也は何でこんな時期に編入してきたんだ？」



「家庭のじじよーだよー」

「へえ」

「そんな疑り深い目で見なくても」。

お父さんの転勤でここらに引越してきたのかも知れないじゃん

「

「転勤で引越してきてもわざわざこんな特色の強い学園には入らないだろ。」

それに此処は金持ち学園だし、編入テストも難しいはずだ。

一般庶民では入るのは色々無理があるんじゃないか？」

「……」

俺は考える。この学園に入る前に俺は変装すると決めていた。

んで、変装しているとばらすのは、白さんと黒と幸介くろだけにするつもりだった。

でも良く考えれば、ルームメイトには正体を明かしたほうが色々得なんじゃないか？

部屋に帰ってもおちおち変装を取れなかったら気疲れしそうだ。

もし変装をばらすとして、圭斗は信用できるだろうか。

mildの奴らにばらされるのだけは御免だ。

まあ、別に人の個人情報を勝手に喋る奴には見えないけど。

「どうかしたか？」

俺が考えこんでいたら、圭斗が不思議そうな目で問いかけてきた。

「……も、いいか。」

まあばれたらばれたで良いか。

一応口止めしとけば良いわけだし。もしばらしたらその時は容赦しないけどね。

「なにがいいんだ？」

「あのねー、今から内緒話するよー？」

「ああ。」

「あ、秘密だからねー？一応聞くけど圭斗って口堅い？」

「それは分からないが、人の個人情報をペラペラ喋ったりはしない。」

「やっぱりー。なら、いいか。」

「……」

俺の勘は当たってたわけね。

「あーそだ、ちょっと待っててね。」

「ああ」

変装を取るには髪の色落とさないといけないよね。シャワーシャワー。  
！。

俺はさつき通った道を戻ってバスルームに向かう。

上のシャツは汚れるから脱いで、ジーンズは履いたままの上半身裸状態でシャワーに向かう。

金色の蛇口を回して、お湯を頭から被る。水に流れる茶色い髪色。

それを髪の色が全部落ちるまでずっと眺める。

排水溝に流れる水が透明になったのを確認してから、俺はシャワーを止める。

脱衣所に置かれているバスタオルを勝手に拝借して、髪を軽く拭く。目の前にある大きな鏡の前に立ち、カラコンを外すと出てくるのは赤い瞳と灰色の瞳の異色。

俺の親は2人とも列記とした日本人。その子供の俺がなぜ異端な瞳の色をしているかは謎だ。  
多分、何代か前に外国人が居て、その血が俺に回ってきたんだろう。所謂突然変異。

親は、そんな俺のことを恐ろしいと言った。  
恐ろしいと言って、決して触れようとも、見ようとも、話そうともしなかった。  
ただ食べるものを与えて、金を与えて、それでお終い。

それは俺が赤ん坊のときでも同じ。生まれて抱いた瞬間に俺の瞳の色に気づき、  
母は『私の子供がなぜこんな瞳を！恐ろしい！』と泣き叫んだという。

それは父も同じ事で、俺は生まれた瞬間から親に恐れられた。あるいは凄惨と思う。  
そこから俺は父の弟である白さんに預けられた。  
白さんに育てられて、俺が小学生になったときに両親と再会した。

両親は俺のことを人目見ると恐ろしいと言った。  
俺は白さんに育てられているときも両親は必ず迎えに来て俺を抱きしめてくれると信じてた。  
でも、実際は両親の目に入った瞬間俺は拒絶された。

俺は啞然とした。俺が今まで心の中で愛し続けていた両親は俺を愛していないのか、と。

実の子供を、白い目で見ながら恐ろしいと拒絶するのか、と。その時俺の心が空っぽになった気がした。

悲しかった。けど、涙は流れなかった。それは悲しすぎてなのか、心が空っぽになったからなのか

それは分からないけど、涙は流れなかった。けど、確かに傷ついた。悲しかった。

俺は未だ目の前で恐ろしいと言い続ける親を視界から外し、白さんの家に戻った。

白さんは俺を見て吃驚した顔をした後、とても悲しそうにとっても綺麗な顔を歪めた。

その理由はなんとなく分かった。俺はまだ子供だったけど、理由はなんとなく分かった。

白さんは、俺の親がああいう人達だって事を分かっていたことを。それでも親に会いたいと頼み込んだ俺に顔を顰めながら会うことを許してくれたという事を。

案の定傷ついて帰ってきた俺を見て、俺と両親を会わせたことを悔やんでいるという事を。

俺を抱きしめながら白さんは綺麗な真っ黒な瞳から涙を流した。その瞬間、俺も涙が出た。

嬉しかった。俺は両親に拒絶されて傷ついていたけど、

俺には俺のために涙を流してくれる白さんが居るのではないかと、そう思って、

ただ安心して、嬉しくて、それでもやっぱり悲しくて、俺と白さんは抱き合いながら泣いた。

.

2人も泣き止んだ後、俺達は互いの存在を確かめるように、さつきよりも強く強く抱きしめた。

体格が違いすぎるために、俺は白さんの胸の中で小さく微笑んだ。多分、白さんも俺の頭上で微笑んでいたと思う。

その6年後、小学校卒業を卒業して中学生になった数日後俺は白さんに言った。

『白さん、俺父さんと母さんの所に行く。』

そう言った瞬間、白さんは固まった。そして悲しい顔をしながら

『行くな、俺はお前が居ないと寂しい。』

弱弱しい声でそう呟いた。俺はそれを聞いて、胸が締め付けられた。でも、俺の決心は揺るがない。

『白さん。俺さ、白さんに頼り続けてる今のままじゃダメと思うんだ。』

『……』  
『きつとき、このままじゃ俺は白さんが居ないと生きていけなくなると思う。』

そんなことになっちゃダメだと思うんだ。

白さんいつもいつてるでしょ？男は強くあり続けろって。他人に頼ってばかりじゃ駄目だって。』

『……でも、』

『年とかそんなの、関係ないんだよ。俺はこのままじゃダメだと思うからこの家を出る。』

『…なににも今じゃなくても、』

『今じゃないとダメ。明日、また同じ生活を続けたら、俺は絶対にこの安心できる空間から出られなくなる。』

『……』

『だから、ね？そんな顔しないで。俺は大丈夫だよ。』

『…幹也』

『白さん！いい年した大人がそんな声出さないの！！黒もいるでしょ？白さんは大丈夫。』

『でも、幹也が居ない』

『…いつでも会えるよ、てか俺が毎日でも会いに行く。』

あー、やっぱり毎日はダメ。週に1回は会いに行く。何かあったら会いに行く。』

『…絶対？』

『ぜーったい！！　だつて俺、白さん大好きだもん』

『…それじゃあ、いいよ。兄さん達の所に行つても。でも、何かあったら必ず来いよ。』

『うん、有難う。それじゃあ俺行くね。』

『えっ、今から？！』

『うん。荷物はもう纏めてるから。それじゃあ白さん、今まで有難う。』

『ちよっ、幹也ー！』

『…ばいばい』



白さんの家を出てから、俺は両親と再会した場所に向かう。  
その場所は2人が住んでいる家だから。  
その家は所謂高級住宅地にあつて、普通の家に比べたら数倍大きい。  
だけど白さんの家には負けるなあ。と思いつながらインターホンを鳴らす。

『はい、どちら様？』

聞こえてきた声は綺麗な女性の声で、4年前に聞いた母親の声と同じだった。

『幹也です』

『……』

『今日から、この家に住ましてください。』

『……ちよつと待って頂戴』

『はい』

少し待っていると、母親と父親が玄関から出てきた。

予想通り俺の顔を見ることはない。ずっと斜め下を向いている。

『どついつつもり？』

母親が綺麗な声でそういった。

『さっき言ったとおりです。俺は貴方達の子供。此処にすむ権利はあるでしょう？』

住ませたくないならそれでいいですが、貴方達が無責任に育児放棄した俺を

無関係の白さんに押し付けたままというのが癪に障ったのでもし住まわせてくれないとしても最後に貴方達が嫌うこの顔を見せ付けてやるうかと思つて。』

『……』

『で、どうですか？住ましてくれませんか？』

『……』

『……まあ、無理ですよ。そうなると思つていました。…1つ提案があります。』

『……なんだ』

父親が答えた。父と母と、初めて会話が出来たと俺は少し嬉しかった。

あれだけ傷つけられたのにそんな反応を示す俺を心の中で苦笑いしつつ父親に目を向ける。

『俺はもう白さんの家に戻るつもりはありません。だからといって嫌がる貴方達と一緒に暮らす気も無い。』

『なら、』

『そこで提案です。俺はまだ中学生。働くにしても年齢的に無理です。』

その上俺は生活をする場所がない。ここで貴方達の出番です。』

『……』

『単純に言えば、世話しなくていいから生活する金遣せ。って所ですかね。』

『……』

『ちなみに、これを拒否するなら俺は無理にでも貴方達の家に住座りますよ。』

2人は沈黙。俺は返答を待つ。

『…分かった。今すぐお前の講座を作るように手配する。部屋は自分で勝手に決める。』

毎週50万ずつ振り込む。それでいいか？』

『いいですよ。思ってたよりも好条件です。』

『その代わり、二度と俺達の前に姿を現すな』

『分かりました。それではお願いしますね。』

俺は、なんとも悲しい契約をした。

次の日、俺は両親の住む家の近くの公園に向かった。

別れ際に父親が『通帳は近くの公園のベンチの横に鞆と一緒に置いておく』

と言ったからだ。なんかマフィアのブツのやり取りみたいでちょっとわくわくした。

公園についてベンチの横を見ると、ちゃんと鞆が置いていて中身を確認すると通帳が入ってた。

俺は苦笑いを漏らす。両親はそんなに俺を見るのが嫌なのかと。毎週50万円という大金を出すのも、俺が足りないと訴えに来るのが嫌だったので

文句を言えない額にしたんだろう。

まあ、俺もあの頃とは違う。そんなことで絶望などしない。

あの人は、そういう生き物なのだ。俺を愛せなかっただけ。ただそれだけ。

入学早々俺は中学を転校して、俺は部屋を探した。

流石に保護者無しで部屋を借りることは出来ないので白さんに甘えた。

俺が決めた部屋は新しく出来た高級マンションの最上階。

少しだけ、両親への腹いせに金を使いまくってやろうといい値段がする部屋にしてやった。

8LDKの風呂付きトイレ付き。文句なしの外見と中身の綺麗さ。最上階なので夜景も最高。

そんな部屋の中に俺は1人。

寂しかった。俺は夜街を歩いてた。そこで年上の奴らに絡まれた。

俺は素質があつたのか、適当に拳や蹴りを交わしたり出来たし、殴ってみれば当たった。

俺は初めての喧嘩で年上の3対1にも関わらず勝った。それは中1の秋。

その時までにはそれなりに学校で真面目やってたけど、段々俺は不良になって行った。

外見も不良っぽく、それまで滅多につけなかったシルバーアクセをつけたり、

学ランを気崩したり、授業をサボったり、学校をサボったり、喧嘩をしたり。

そんな俺を周りの奴らは、冷めた目で見るか怯えた目で見る。

例外に、俺の外見目当てで媚びてくるバカな女もいっぱい居た。

俺は自覚はしていないがどうやら美形らしい。鏡を見てもそんなこと感じたことは無い。

けど、人目から見ればやはり格好いいのか、媚びた目で近づいてくる奴等が絶えなかった。

あと、強い俺に憧れたとか何とかで付きまってくる変なチビの男も居た。

教師は俺を注意しない。俺に呆れたのか、それとも怖くて出来ないのか。

そんなことはどちらでもいい。とにかく、毎日がつまらなかった。

何に対してもつまらない。いつも食べているコンビニの弁当も味気ない。今日も空に色は無い。

そんな俺が笑うのは、喧嘩しているときと1ヶ月に1、2回白さんに会うとき。

白さんはどんどん見た目が不良になる俺を見ても、

他人と距離を置くために、俺がされたら絶対むかつく、やけに間延びした喋り方をしてても、

『お前もヤンチャになったなあ、お洒落を気にする年頃だからなあ』と茶化しながら笑った。白さんは工藤財閥の社長だ。

本当は俺の父親であり白さんの兄である工藤くわいとう 青が継あおぐはずなのだ  
けど

青は庶民の母親と結婚するために、工藤家は継がないとそう告げた。俺の祖父に当たる人に猛反対されらしいけど、青は母との結婚を選んだそうだ。

だから、白さんが工藤財閥の社長なのだ。

そんな忙しい白さんだから、月に1、2回しか会えない。けど、俺は満足だ。

それより、俺は父と母の結婚の理由を聞いたときに、思った。

そこまで愛し合った2人の子供が目の色が異端であるという理由から捨てられるのはおかしいと。

だけど、愛し合った2人だからこそ、その愛の結晶が異端だったら、それこそ辛いことなのだ、今なら理解できる。

それでも俺は2人を許しはしないけど。

喧嘩しているときは、ただただ楽しかった。日ごろのストレスを発散できた。

夜の街に居る奴らは皆俺と同じような格好で、白い目で見られることもない。

互いの名前など関係ない、ただ殴り合って勝者を決めるだけ。

俺はその単純な行為が好きだった。

その日も喧嘩をしようとかを出た。それは中3の春。

3年も住んでいる家は、8つも部屋があるにも関わらず使っているのは1つだけ。

家の真ん中の25畳ほどの大きな部屋。普通に生活したらダイニングになる場所だろうか。

そこにはベッド代わりの大人5人が座れるほどの大きな黒のソファ1。

その前にガラスのテーブルが置かれていて、

テーブルの奥には滅多につけない42インチの液晶テレビが無造作に置かれている。

広い茶色の床には、ノートパソコン3つ大型パソコン2つがドンとある。

1人で族相手に喧嘩してたら、どうしても情報が必要だから情報を集めるためのだけのパソコン。

気分が向いたときはある族にその族の敵の情報を売ったりもしてる。

そんな家を出て、俺は歩きなれた道を歩む。

その日は何と無くいつもあまり通らない狭い路地を歩いていた。



路地裏に着くと、1人の男が倒れてた。どうせ喧嘩に負けた奴だろう。

いつもは無視してるけど、その日は気分的に声を掛けてみた。

話してみると、そいつは関西弁だった。

だから、大阪の奴なのかと聞いたら、9年前に引っ越してきたという。

俺はその時点で少し噴出しそうだったけど平常心を保ち、まだ関西弁が抜けないのかと尋ねた。

そしたら、『東京弁は好かん』

とか言い出した。俺は盛大に噴出した。だって、東京弁だぜ？標準語だろ。

俺は喧嘩と白さんにあつた時以外で、白さんと離れてから初めて笑った。

俺はその日吃驚するくらい、意味も無くただ笑い続けた。

その次の日、またそいつを見かけた。  
そいつは昨日痛い目にあつたことを忘れたのか、また大勢に囲まれていた。

相手がそいつにとどめを刺そうとして拳を振り下ろしたとき、俺は間に入ってその拳を受け止めた。

自分でも吃驚した。何度も人がリンチされてる所なんて見たことがあつた。

けど、助けたことは1度も無かつた。でも俺は止めた。

なぜ？ 少し考えて、答えが分かつた。

俺は、名前も知らないコイツを気に入つた。ただそれだけ。

答えが分かつてからは簡単。俺のお気に入りに手を出した罪は重いぞと、

そいつを殴っていた賽火の奴らをなぎ倒していった。

そいつは後ろでただ呆然とそれを眺めてた。

俺が振り返ると正気に戻つたのか、驚いたような顔をしていた。

なぜ逃げなかつたのかと聞くと、プライドが許さなかつたと。

俺はますますそいつを気に入つた。

なぜ街に来たかと訪ねると、俺のこと探してたつて。

俺は嬉しかった。喧嘩がまったく出来ないこいつが俺を探しに街に出たのだと。

俺はコイツに求められたのかと、そう思い俺は嬉しかった。

名前を聞いたら、自分が先に名乗るのがマナーだといわれた。それもそうだと名乗ると、相手も名乗った。

そいつは幸介って言うらしい。よろしくというのと、何故か上から視線で宜しくされた。

幸介と握手して目が合うと、何故か無償に面白くなって、2人で爆笑した。

・(前書き)

うひゃほおおおおおおい！！

ララ@自由に生きる　さんから感想もらいました！！

白さんいいですね！私も白さんみたいな叔父様が居たら…(

感想有難う御座いました！！最新意欲沸きまくりました

幸介と会ってから少しした後、幸介の噂を耳にした。  
金髪の奴がやたらと喧嘩が強いと。通り名は金猫だと。

金髪なんてそこらじゅうに居たけど、俺は幸介のことだと確信した。

俺は喧嘩するときは大抵全身黒い服を着ていて  
それに加えて一度染めた赤黒の髪色が気に入ったので毎回その色に  
染めており、  
喧嘩する時の動きが綺麗で、蝶が空を舞っているようだからと、黒  
蝶と呼ばれた。

俺が黒蝶として街を歩いているとき、幸介に会った。  
俺は幸介に会うときに黒蝶の格好をしたことは無かったから、  
幸介は俺が黒蝶だとして驚いたようだった。

そして、幸介がどれだけ強いのか見るために俺は幸介と一緒に族を  
潰そうと言い出した。  
幸介がokしたのを確認して、適当に族を潰した。幸介は初めてあ  
った時より断然強くなった。  
そこら辺の不良じゃ到底叶わないほどに。

まあ、俺には絶対負けれると思った。勝つ自信もあった。  
実際幸介と行動をともしていくときに手合わせしたら案の定俺が  
勝ったしね。

族を潰してから打ち上げと言うのは可笑しいけど、俺の家で飯を食べた。

コンビニでジュースや酒やお菓子や弁当などを大量に買い占めて俺の家へ向かった。

マンションの前に着いたとき、幸介は上を見上げて口を広げたまま固まっていた。

その顔は傑作だったけど、荷物もいっぱいあるのにそこでずっと固まってる幸介の尻を軽く蹴って前へ進ませた。

幸介は心此処にあらずといった風にヨタヨタ歩いてた。エレベーターに乗り込んで最上階のボタンを押す。

チンツと軽い音がなりエレベーターが止まったので俺と幸介は降りる。

一階に10部屋あるその他の階と違って、最上階は俺の住んでる部屋をあわせて3つしかないから広い。

未だボーっとしてる幸介を半ば強引に鍵を開けたドアの中に押し込む。

玄関のドアを閉める音でやっと目覚めたのか

『え、此处どこや』

とか間抜けなことを聞いてきた。

『バカだなー。何処って、俺の家だよ？』

『幹也、こんな所に住んでるんか』

『うん。』

『家族は？』

『居ない。1人暮らしだよー』

『…そおか』

『うん、ほらさっさと入って。玄関で止まられちゃ進めないでしょ

ー！』

『あ、すまん』

2人でいつもの部屋に向かう。その部屋を見て幸介はまた吃驚して  
たみたいだけど

俺はお腹が減っていたので無視。

いつもはコーヒーを置いてあるだけのガラスのテーブルに  
ビールの缶やペットボトルや弁当を置いていく。

2人でテーブルを囲んで手を合わせる。

『頂きます』

『…頂きます』

そして俺はいそいそと弁当を開ける。それを見て幸介も弁当を開ける。

2人で弁当を食べていく。俺は思った。

そういえば、学校以外で白さんと黒以外とご飯を食べたのは初めてでは無いかと。

すると自然と笑顔になる。いつも1人で食べている食事。

白さんに会える日は喋ることが最優先なので食事はあまり食べない。他人と食べる食事はこんなにも美味しいものなのか。そう考えていると幸介が呟いた。

『…幹也、お前寂しくないか…?』

『んー?』

『今は俺が居るからええけど、お前いつもこんな広い部屋で1人やる?寂しくないか?』

『そだねー、寂しいっちゃ寂しいかな?』

『ならば、時々俺と一緒に飯食おうや。』

『え?』

『俺全寮制の学校入ってるから毎日ってわけにはいかへんけど週2ぐらいでさ、一緒に飯食ったり話したり喧嘩したりしようや。』

『…馬路?』

『馬路。あかんか?』

『いや、すげー嬉しい。ありがとう。』

『よかったー。断られてたらめっちゃ恥かかったわ』

『ふはっ、んじゃまー、これから宜しく?』

『おう。』

そこから俺達は酒にジュースを混ぜたりなんてよく中学生がファミ



レスのドリンクバーで

ジュースとジュースを混ぜるようなことをして遊んだ。

その日から、俺達は週に2回一緒に夕食をとりにした。喧嘩も一緒にすることが多くなって

俺達は黒蝶と金猫の族つぶしペアとして有名になった。

幸介と俺と一緒にご飯を食べるようになって数ヶ月後、俺は幸介になんで一人で暮らしているのかとか、色々話した。そしたら幸介も自分のことを話した。

幸介の両親は9年前に交通事故で亡くなり東京に居る親戚の家に預けられてそのまま如月学園に入学したそうだ。

俺は実の親が生きているのに愛されず、幸介は愛した親を亡くした。正反対な俺達は互いに顔を見合わせ苦笑した。

『『人生って、上手いかないな(いかへんな)』』

なんて言いながら俺達は互いの傷を舐めあうように笑った。

そんなある日、白さんと久し振りに会った。

白さんは前よりも綺麗になっていた気がした。

『幹也、お前表情が明るくなったな。』

『そう?』

『ああ。良い事でもあったか?』

『…俺さー、心から友達と言える奴が出来たよ』

『そうか、友達が出来たのか。良かった。』

『うん。白さん、今まで迷惑掛けてごめんね。』

『迷惑なんて掛けてなんぼだ。お前は俺の大事な息子だからな。』

白さんはそういつて優しく微笑んだ。それに釣られて俺も微笑んだ。そしたら、いきなり白さんが真剣な顔つきになった。

『幹也、お前高校どこに行くか決めたか？』

もう中学最後の年の2月。受験シーズンなのだ。

『特に決めてないよ』

『そしたら、俺が理事長をしてる如月学園に来ないか？』

『……え』

如月学園ってあれだよ。幸介の居る学園だ。それに族のmildの奴等が居る場所。

mildの訳は温和だけど、メンバーは温和なんて言葉似合わない凶暴な奴らばかり。

俺と幸介がよく相手をしていた族だ。もちろん負けたことは無い。それでも懲りずに街で会えば必ず喧嘩を吹っかけてきた面倒な奴ら。

『……駄目か？そこなら結構俺も居るし、時々会えると思うんだが……』

白さんが不安そうな目で俺を見た。

如月学園……。幸介も居るし白さんも居てmildも居る……。

どうしよう。mild面倒なんだよな。正直mildが居なかったら速攻入ってると思う。

俺は考えた。mildにはれない様に変装すれば良いんじゃないかと。

そう決まれば俺は早かった。

白さんに行く！！と返事してから幸介にメールした。

.



一週間後というなんとも微妙な時期に編入してしまったのだ。

「…あー、忘れてた。」

瞳を見て過去のことを思い出してたらコンタクトを外した理由を忘れていた。

そつえば俺は今圭斗に変装をしているという事をバラすために変装を取っていたのだった。

ジーンズに入ってる携帯を見ると圭斗に待っててと言ってから6分ほど経っている。

俺は少し乾いている髪をぐしゃぐしゃとタオルでかき混ぜ水気を取ってから

さつき脱いだ上の服を着て圭斗が待つ部屋へと向かう。

扉を開けて圭斗が俺を見る。少し驚いたような顔をしていた。

「おまたせー」

「……」

「あのね、これが内緒の話。俺夜の街で族つぶしやってて、黒蝶って呼ばれてるんだよね。」

んで此処の生徒会の奴ら mild って族やってんのね。俺結構 mild の相手しててさ

見つかると色々面倒だからちょっと変装してるんだ。」

「…黒蝶？」

「そ。知ってる？」

「生徒会が黒蝶を探してるって噂になってる。」

「ええー。益々めんどい。やだなー。じゃあ尚更このことは内緒だよ?」

「ああ。」

「あと、もう1つの秘密。俺ね、本名は工藤幹也。」  
「?!」

「ふはっ、間抜け面ー」

「っお前工藤白の息子?!」

「あー、違う違う。俺白さんの甥っ子。ついでに工藤(工藤) 黒コウの甥っ子でもあるよー」

「…なるほど。でも工藤家の奴なんだな…?」

「んま一応?直接はあんま関わり無いけどねー。白さんと黒には仲良くさせて貰ってまーす」

「へえ…。」

「んー、秘密はこれぐらいかな? 圭斗はなんか聞きたいことある?」

「…お前のその目は天然物か?」

「そうだね、天然物だねー」

「へえ…。」

「それだけ?」

「あ、その髪の色は?」

「あー、これは人工的なもの。この色気に入ってるさー。地毛は真っ黒だよ」

「そうか。後は特に無い。」

「ん、了解。」

圭斗は俺の目を見て少し驚いていた。まあ確かに赤と灰色のオッド

アイとか珍しいもんねー。

親も恐ろしいって言ってたし。でも実はこの目気に入ってるんだよね。

燃える赤い夕焼け。夜と朝の境目の灰色の空。

俺この2つの空が好き。だからその色の目してるなんて最高じゃん？

小さいときはこんな目大嫌いだったけど、今じゃ大好き。

変装をバラしてから俺と圭斗は色々な話を話した。

俺の過去のことはもう誰にも言うつもり無いから話してないけど。

この学園のこととか、白さんのこととか生徒会の話とか。

そんなことを話してたら8時になっていて、圭斗が食堂に行こうと行った。

「あ、ちょっとまってー！髪とか色々しないと」

「ああそうだったな。分かった。さっさとしろよ」

「はいはい」

少しの間で俺と圭斗の距離はグッと縮まったと思う。

俺は急いで部屋のクローゼットに入れた髪色スプレーを取りだし頭にふる。

プシューと小気味いい音がして全体的に茶色くなったのを確認してスプレーをしまう。

その後洗面台に置いたままのカラコンを取りに行って目に入れて眼鏡を掛けて玄関に向かう。



.

「おまたせーん」

「遅い。」

「ごめんごめん。って3分しか経って無いからねー」

「はいはい。そろそろ行くぞ。」

「んもー！」

なんて軽口を叩きながら玄関を出て扉を閉める。オートロックのそれはしまると同時にカチツと音を立てて鍵を閉めた。

この学園は無駄に広いくせに食堂は教室がある場所にしかないそう  
だ。

俺は面倒くさいと思いつつも道が分からないので前を歩く圭斗に  
ついていく。

圭斗が此処だ。と行って足を止めた前には大きな城があった。

あのハリー ッターの学校かと言いたくなる様な大きな城だ。

そこが教室がある場所らしい。

俺はこの学園を作った俺の叔父に当たる人に若干呆れながらも圭斗  
の後を追って城の中に入る。

中身も城そのもので俺はもっと呆れた。

- 1階は職員室、食堂などがある場所
- 2階は音楽室、理科室、保健室など特別教室がある場所
- 3階が1年生が利用する教室
- 4階が2年生が利用する教室
- 5階が3年生が利用する教室
- 6 - 7階は生徒会室
- 8 - 9階は理事長専用室

この城の中身はこんな感じ。

理事長室は良いとして、生徒会に2階も使わせるのはどうなんだろう。

なんて考えてる内に食堂についていた。

・(後書き)

城の中の設定ゼロのココロから抜き出しちいました( ^ ^ )  
考えるの面倒とか思っ  
てないんだからねっ! / / /

自重します。

「ボーっとしてると置いてくぞ」  
「待ってよ意地悪ー！」

扉の5mぐらい前で突っ立ってる俺を置いて圭斗はスタスタと歩き出す。

待ってというときっちりその場で止まった圭斗を見て俺は微笑する。俺は少し小走りして圭斗の横びそれを確認した圭斗が扉を開ける。

大きな扉を開けて食堂に入る。すると高くて黄色い悲鳴が聞こえた。え、此処って男子校だよね。なんで女の子みたいに高い声が聞こえたんだ。

「え？」

「はあ……」

俺が頭にハテナマークを浮かべていると隣で圭斗がうんざりしたような顔をしていた。

え、俺か？今の俺が悪かったのか？

「違う。」

「え?!」

俺の心読まれたー!!!圭斗ってエスパー?!

「声に出てるから。」

「あ、うん。」

うん、知ってたけどね。ちょっとやってみただけ。  
てか、圭斗が歩きたび周りの悲鳴が大きくなってるんだけど。  
これはあれか。白さんが言ってたカッコいい奴はモテるとか言う例  
のあれなのか。

そういえば圭斗って美形だったな。超絶美形だったな。

じゃあれじゃないか。白さんが帰り際にもてる奴には親衛隊なる  
ものが出来るから  
あまり近づきすぎると制裁を受けるーとか言ってたけど  
今俺人気者の圭斗に近づいてるよね。え、これってあれか。入学早  
々制裁受けるのか。

くっそー圭斗め。なんでそんなかつこいいんだーチクショー！！  
もっと不細工だったら気兼ね無しに近づけるのに。制裁つけたらど  
うすんだよー。今すぐブスになれー

あ、でも制裁とかちょっと楽しそーかも。

どうしよう、ちょっとわくわくしてきたかも！よっしゃ圭斗もつと  
騒がれるー！！

「お前全部声出てるぞ」

「……え」

「だから、全部聞こえてる。」

「……全部？」

「うん。ブスになれやらもつと騒がれるやら全部。」

「……ゴ、ゴメーンネ」

「……はあ。」

そ、そんな明らかに「呆れた。」みたいな雰囲気醸し出さなくても  
！！

でも気をつけないな。エスパーって言ったときはわざとだけど  
今のは普通に口に出てたし。

「とりあえず座るぞ」  
「…ん」

圭斗とは黄色い悲鳴を聞きながらも平然としてる。多分聞きなれてるんだろう。

でも俺は別！うるさいっての。耳痛いから。

それでさっきから黄色い悲鳴いがいの音も聞こえてるんだよね！。

『圭斗様の横に居る人は誰？』

『あいつ、可愛いな…』

『ううん、かっこいいだよ！』

『てか、かっこいいし可愛いっつーか。』

『あいつ抱きてえ…』

『僕を抱いて！！』

『確かにかっこいいけど、圭斗様に近づくななんて許さない！』

『ていうかあいつ誰！』

とかとか。

んー。可愛いとか誰に向かっていったんだこのヤローって感じだよ  
ね。

男に可愛いとか可笑しいだろ。いや、しーちゃん（襲われてた子）  
は可愛かったけど。

それに抱きたいとか抱いてとかちょっと吃驚。やっぱゲイやバイの



巢窟つてのは嘘じゃないのか。  
男を抱くのも男に抱かれるのも勘弁してほしい。

あとやっぱり居ました。圭斗の親衛隊らしき人物。男の嫉妬は醜い  
よー

「さっさと座れよ」

「ん、ああ。ごめん」

圭斗に促されてフカフカの椅子に座る。

机の上にiPadのような形の物が埋め込まれてて、圭斗はそれを  
慣れた手つきで操作してる。

所謂タッチパネル式のメニューだ。

「幹也は何食べる？」

「んー。俺今日はカルボナーラな気分。」

「分かった」

圭斗は画面の洋食と書いてある所をタッチしてパスタの中のカルボ  
ナーラを選んで決定を押した。

5分ぐらい待つとボーイさんがカルボナーラと圭斗が頼んだグラタ  
ンを持ってきた。

さっきから突っ込もうと思ってたけど学校の食堂って行ったら  
割烹着来た50代のパーマあてたおばちゃんが白いネット被って料  
理してるんじゃないのか。

でも、気にしたら負けだ。そう考えて俺はボーイさんに有難う御座  
いますと軽く頭を下げて

ボーイさんが少し驚いたように目を見開いた後さわやかに微笑みながら「失礼します」  
と会釈したのを見て目の前に置かれたホクホクと湯気のたつカルボナーラに手をつけた。

・(前書き)

1ヶ月ぶりぐらいの投稿です)\*。\*  
短めですがご勘弁を…(;。\*(

「あ、やばい、すごいおいしー」

「この料理はなんでも美味しいぞ」

「さっすが金持ちー。もしかして一流シェフが料理してんのー？」

俺がニヤニヤと笑いながらそういつと圭斗は「知ってたのか。」とキョトンとした顔で言ってきた。

うあー、馬路かよ。馬路で鉄板な金持ち学園なのかよ。

「…いや、うん。もういいやー」

「…？」

そこから色々雑談しながら食事に手をつける。

もうそろそろ皿の上のものが無くなるって頃に食堂が急にうるさくなった。

「うおー、吃驚したー」

「……面倒な。」

俺が吃驚していると圭斗は横でうげーって顔してる。

「どしたのー？」

「あー、生徒会の誰かが来たみたいだ。」

「…さいあくー」

俺たちは生徒会の一員らしき人物と会わないように急いで残りを食べた。

もう何も乗っていない皿を机の上に置いたまま俺達は席を立った。

出来るだけ目立たないようにと心がけてたけど、そういえばこっちには人気者の圭斗がいたんだった。

圭斗が席を立った瞬間周りが少しざわめいた。

俺は気づかれないように圭斗を横目で睨んだ。視界に入った圭斗は苦笑いしながら頬を掻いていた。

はあ。しょうがないなあ。まあ別に圭斗が悪いわけじゃないしね。俺は無言で歩き出した。それに気づいて圭斗が着いてくる。もう少しで出口に着く頃に肩をトントンと叩かれた。

……嫌な予感が。

だってその瞬間ざわめきが大きくなったんだよ。でも振り向かないわけには行かないし。

俺は覚悟を決めて振り返った。目の前に灰色の笑顔を存分に振り撒いている麻雄がいた。

「吉野先輩どうかしましたー？」

「うん。また幹也君に会えるかと思って食堂来た途端に帰ろうとしちゃうから、つい。」

「そうだったんですかー。気づかなかったです」

「いいよ。もう会えたしね。幹也君は明日から学校に来るの？」

「そーですよ。とーっても楽しみです」

「ふふっ、また今度遊びに行くね。」

「…楽しみにしてまーす」

「うん、僕も楽しみ。」

「それじゃー、俺達はそろそろ帰りますねー？」

「ああ、ごめんね引き止めて」

「いえいえー、それではー」

「うん。ばいばい」

俺は早足で出口へと向かった。  
食堂を出て夕飯ラッシュで誰もいない廊下を俺と圭斗はうんざりした顔でとぼとぼと歩く。

「…圭斗の所為だからねー」

・(前書き)

こんにちはこんばんはおはようございます。  
御久し振りの最新です。

短めです……



「いや、まあ、すまん。」

圭斗は困ったように眉を下げて苦笑した。

……素直に謝られると困るんだけどなあ。攻めるに攻めれないじゃん……。

「……まあ、いいや。」

「すまん。ありがとう」

圭斗は嬉しそうに笑うと、足取りも軽く俺の先を歩いていった。

……なんか可愛いなあこいつ。最初はクールと思っていたけど、意外と表情豊かだし。

そんなことを思ってる間にも圭斗は前を進んでいく。

俺は置いていかれないように少し駆け足で圭斗の元へと急いだ。

部屋に戻って、俺はコンタクトを外す。

コンタクトなんて今までつけなかったので目が疲れる。

黒色のコンタクトを専用のケースに直して、仕事部屋に向かう。

「ん〜、とりあえずは俺の個人データを弄らないとな〜」

俺の個人データ操作ぐらいならノートパソコン一台で大丈夫。

というわけで机の上に乗っているノートパソコンを立ち上げる。

学園の個人データページをハッキングして俺の情報を色々と書き換える。

白さんにハッキング宣言していた為か、セキュリティが甘くて

簡単だった。

.

名前を工藤幹也から山本幹也に変更した。

あとは、俺が通っていた中学は山部中学というのだけど、アメリカからの帰国子女という設定にしておいた。

小さいときによく白さんたちにアメリカに連れて行ってもらったので英語は完璧だから問題は無い。

住所はアメリカの知り合いに許可の電話をかけてから、

その知り合いの家の住所を載せてもらった。高校入学のために日本に帰ってきて、

その学校が全寮制なら日本に家が無くてもおかしくはないかなと思っただけだ。

あとは家族構成。俺は先代の外国人の血による突然変異のせいで白人のように色が白い。

それに今は薄い茶髪ということで、父親がアメリカ人という事にしておいた。

これでまあ問題は無いな。

最後の仕上げにセキュリティをきつくして、誰かがセキュリティを破れば

俺と白さんに知らせが来るように設定して、パソコンの電源を落とす。

時計を見るとパソコンを開いた時間から20分程度たった。

今日は色々あったので20分だけでもとても疲れた。

椅子の背もたれに背中を預けて、大きく伸びをする。

このまま寝たいところだけど、髪の毛に色が付いたままだから、  
渋谷部屋に着替えを取りに戻り、途中にリビングで圭斗に会って、  
風呂に入ることを伝え、了承を得て浴室に向かう。

脱衣所で服を脱ぎ、バスタオルなどが置いてある棚の上に着替えを  
置く。

浴室の扉を開けると、相変わらずライオンの口からはピンクのお湯  
が出ている。

これだけお湯が沢山あると湯気がありそうだけど、そこは金持ち学  
園なので

なにかしら湯気を発生させないための機械でもあるのか、湯気が少  
ない。

髪の毛をそのままに湯に浸かると茶色くなってしまっているので、本日二  
回目のシャワーを浴びる。

まあ、風呂に入るのは嫌いじゃないので問題ない。  
むしろ、1日に何回でも入りたいくらいだ。俺は潔癖症とまではい  
かないけど綺麗なものが好きなんだ。

排水溝に流れる水が透明になったのを確認して、  
一人ではいるのはとても大きすぎる湯船に体を沈める。

あるていどぬくもった後に湯船から出て、髪や体を洗う。  
さつき圭斗にシャンプーなどを使っていいかと聞いたら  
オーケーの返事がもらえたので遠慮なく使う。

その後に、もう一度湯に浸かってからもう出ようと思ってまた湯船  
に入ろうとすると、

浴室の奥のほうに個別の浴槽があるのを発見して、そこに向かう。  
一人が座って足を伸ばせるぐらいの大きさのくぼみがあった。  
段差で滑らないように気をつけて入る。

するといきなりブクブクブクと水の泡が出てきた。  
どうやら人が入ると反応するようになっていたジャグジーのようだ。

どんだけすごい学園なんだよここ…。

俺は少し呆れながらも、ジャグジーが疲れた体を程よく刺激してく  
れて

ふわふわしたゆったりな気分になりながら少々ジャグジーに打たれ  
ていた。

そろそろのぼせるといふ所で切り上げて、浴室を出る。

脱衣所で体や頭をタオルで拭いて水気をとる。

パジャマ代わりの薄い紫色の甚平を着て、家から持ってきた愛用のハブラシで歯を磨く。

また圭斗が使っていていいといってくれたドライヤーを利用して髪の毛を乾かす。

あるていど乾いた所でドライヤーの電源を切り、浴室をでる。

・(前書き)

久し振りに最新です。

アイディアは出るんですけどどっつなげていいのかわからなくて  
放置状態でしたー(\*。・、)  
ゼロのココロも頑張りますね。

読んで下さると嬉しいです

バスタオルを肩に掛け、リビングに戻る。

「圭斗ー、次入っていいよー」

「ん、ああ。後で入る」

「んー。ねえ圭斗、ミネラルウォーター飲んでいいー？」

「ああ。この家のものとか、適当に使ってくれていいから」

「りょうかーい」

冷蔵庫を開けてミネラルウォーターを飲む。

湯上りのポカポカした体に冷たい水が通る。サッパリしたー。

「圭斗っていつもは眼鏡かけてるのー？」

「ん、ああ、今だけだ」

圭斗は難しそうな顔をしてパソコンと睨めっこしている。

その画面を覗くと、どうやら株を見ているらしい。

「なにこれー？」

「ちよつと個人的に営業をな。」

「ふーん。難しそーだね。」

「簡単ではないな」

「コーヒー淹れようか？」

「今はいい。ありがとう」



「あいよー」

株を見ていても暇なので俺はもう寝ることにした。  
夕方寝たけど、食堂でのゴタゴタでなんか疲れたし。

「それじゃあ圭斗、俺もう寝るねー」

「おやすみ」

圭斗に挨拶をしてから自分の部屋へ向かう。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4663t/>

---

幹也君の日常

2011年12月23日01時52分発行